

令和7年度 学生チャレンジプロジェクト 成果報告書

事業区分 ④⑥⑦

プロジェクト名	戦後80年に向けた「ダークツーリズム」に関する情報発信—学術的研究と実践的取組—
代表者 (所属・学年・氏名)	現代マネジメント学部・4年・野田歩実
責任教員名 (役職・氏名)	現代マネジメント学部・准教授・水野英雄
予算総額	230千円

1. プロジェクトメンバー (氏名・学部・学年・役割)

野田歩実・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年・代表者、プロジェクトの統括、予算の管理
坂根璃胡・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年
高橋華・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年
角田遥彩・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年
二ノ宮杏璃・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年
松田成未・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年
武藤愛佳・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年
山下美並・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年
山田麗香・現代マネジメント学部現代マネジメント学科4年
研究・現地調査の実施、学会等での発表、各種資料の作成、広報活動は全メンバーで取り組んだ。

2. プロジェクト開始の背景・経緯や目的等

プロジェクトメンバーは、2023年度に愛知県主催の『観光まちづくりアワード』において『「明るいダークツーリズム」による産業観光—愛の地(あいち)で戦争の闇に明るい光を照らそう—』をテーマにした提案で奨励賞を受賞した。また、同一作品で審査された『学生がつくる愛知県の着地型旅行プランコンテスト』(主催:一般社団法人全国旅行業協会)では優秀賞を受賞した。提案内容は、愛知県は製造業が盛んで産業観光が活発であり、戦争との関わりを考えるダークツーリズムの要素を取り入れることで平和学習として修学旅行などの教育旅行を誘致するものである。愛知県内のダークツーリズムのスポットを調べ、関係者へヒアリングを実施した上で3つのコースを考えたことなどが評価された。本提案は関係者の関心も高く、『中日新聞』令和6年2月16日、19面に「戦跡 教育旅行で活用を 相山女学園大生 愛知の観光と合わせて3コース考案 県コンテストで入賞」として紹介された。

この取組が多くの人々から支持され、評価されたことで継続して取り組むことの意義を感じ、2024年度には令和6年度の学生チャレンジプロジェクト(応募時の名称は「相山 学生チャレンジ応援プロジェクト」)に「愛知県内の「明るいダークツーリズム」スポットの教育旅行での活用のためのパンフレット作成とインターネットによる公開、報告会の開催」を応募したが採択されなかった。しかし、戦争や災害の遺構を観光資源として活用するダークツーリズムに他の観光目的を合わせることで訪問者を増やす「明るいダークツーリズム」は関係者の関心が高く、多くの発表を行うことができた。

令和6年7月13日に知多半島での現地調査を実施し、その成果を踏まえて令和6年8月11日に半田市社会福祉文化会館(瀧上工業雁宿ホール)で開催された『第3回オール知多ピースフェスティバル』において「愛知の『明るいダークツーリズム』で戦争と平和を学ぶ」をテーマに、アメリカ軍の戦闘機による銃撃跡が残る半田赤レンガ建物や河和海軍航空隊の遺構、戦死者を偲ぶ軍人像群などを紹介した。また、トーク「若者は平和のために何をすべきか」では、今回の取組で学んだことや平和のために何をしたら良いかをフロアの参加者を交えてグループワークで話し合い、活発な意見交換を行った。

取組の内容と発表に関する記事は『朝日新聞』令和6年8月2日、23面に「つなぐ平和 私も 2 知るために…遺構で観光を 戦跡巡る旅行プランづくり」、『中日新聞』令和6年8月8日、14面に「戦争遺構×観光スポット 知多半島でダークツーリズム 相山女学園大生が調査」として掲載された。また、中京テレビ『キャッチ』【戦争遺構と観光地を巡る旅】愛知の知られざるスポット 大学生が考案 若者目線の伝え方に“賛否”も…』令和6年8月15日、メ〜テレ（名古屋テレビ）『ドデスカ+（プラス）』「明るいダークツーリズム」戦争遺跡×地域の観光資源 愛知の学生が学んだ戦後79年』令和6年8月14日が放送された。

令和7年1月25日の相山女学園大学での『日本経済政策学会第56回中部地方大会』における特別セッション「観光における教育旅行の意義と展望」では、少子化により児童・生徒数が激減したことによる教育旅行のニーズの変化や総合学習「探究」での活用を考慮して、「戦争遺構の教育旅行での活用-愛知のダークツーリズム-」をテーマに教育旅行の平和学習としてのダークツーリズムを愛知県で実施するプランについて報告した。参加者からは、ダークツーリズムの検定を設ける、関係人口を増やすことに取り組む、より受け入れやすい名称を考える等のコメントやアドバイスがあり、今後の研究の推進の必要を実感した。

2025年度は昭和20年（1945年）の太平洋戦争の終結から80年であり、学生チャレンジプロジェクトとして取り組むことの意義は大きいと考え、「戦後80年に向けた「ダークツーリズム」に関する情報発信—学術的研究と実践的取組—」を提案し、採択された。

3. プロジェクトの成果及び達成状況

2. で述べたように、戦後80年という区切りの年に、ダークツーリズムの普及のために、①ダークツーリズムに関する研究の整理と経済学的研究の展開、関連する研究として加害性とジェンダーバイアス、②三河地方の戦争遺構の現地調査を行い魅力あるコースとして紹介するパンフレットの作成、③イベント、学会等での発表を行い、関係者だけでなく多くの人々にダークツーリズムを知ってもらう取組を行った。詳細に関しては、資料を添付する（添付資料①、添付資料②、添付資料③）。

① ダークツーリズムに関する研究の整理と経済学的研究の展開

ダークツーリズムの対象となる戦争遺構の適切な維持管理のためには経済学の知見に基づいた分析が不可欠である。しかしながら、ダークツーリズムに関する研究は多岐にわたる分野で活発に行われているが、経済学的な研究は少なく、ほぼ皆無である。ダークツーリズムに関する主要な研究分野は、歴史学、社会学、地理学、文化人類学、観光学と分類できるが、明確な経済学的研究は少ない。また、経済学や経営学による分析というよりも観光学と分類される内容の研究である。その理由は以下の通りである。

- ・戦争遺構を「金儲けの対象」とすることに批判がある。
- ・入場料収入のみで経済波及効果が大きくないため、費用対効果での分析が困難である。
- ・戦争遺構の維持管理の費用は「補助金で維持する。」ケースが殆どである。

そのため、経済学的研究によってダークツーリズムやその対象となる遺構の経済学的な評価や活用の方策が示されることは先駆的な研究となり、大きな意義を持つ。

具体的には、以下のような研究を想定できる。

- ・ダークツーリズムの市場性や経済波及効果を分析し、観光産業における新たな可能性を検討する。
- ・ダークツーリズムの対象となる遺構のマネジメントやマーケティングを行うことで観光客の増加や満足度を高める。
- ・ダークツーリズムの遺構の経済的価値を評価し、持続可能な観光のあり方を検討する。

ダークツーリズムの要素がある観光資源で訪問者を増やしている事例には長崎県の軍艦島（端島）がある。軍艦島は炭鉱であり、小さな島には数千人の労働者とその家族が暮らしていた。1974年に閉山して住民は退去して無人島となった。「軍艦」のような独特の形状が映画などで取り上げられてコンテンツツーリズムの対象となったことで2000年代に観光資源としての活用が始まり、2015年には世界遺産に登録された。軍艦島は産業化に貢献した一方で、過酷な労働環境や戦時中の外国人労働者の問題などでダークツーリズムの対象となった。戦争に直接的に関連したものではない、また、産業遺産として世界遺産となったことから、ダークツーリズムの要素がやや薄く「グレートツーリズム」程度に位置付けることができる。コンテンツツーリズムの観点では、史実を正確に反映した内容ではないが、強制連行をテーマにした韓国映

画がヒットしたことで韓国人の旅行者が急増した。このことはコンテンツツーリズムとダークツーリズムの相乗的な効果を示している。観光資源化が成功したことで、現在は保存のための工事が進められている。

先行研究としては風化が進み保存工事が問題になっていることから建築学、土木学等の観点からの研究が多い。また、歴史学の観点から当時の生活や社会情勢を踏まえた研究が多い。古賀広志「ダークツーリズムからみた軍艦島の意義」『エキシビションとツーリズムの転回』研究双書 第176冊、293~336ページ、2022年、関西大学経済・政治研究所では産業遺産としての価値や意義が論じられており、経済的視点が含まれている。

ダークツーリズムに関する研究を、各学問分野に共通する内容により整理すると、

- ・ダークツーリズムの定義
- ・ダークツーリズムのあり方（何を学ぶか、何を伝えるか）
- ・特定のダークツーリズムスポットに関する調査

という分類ができる。

いずれにしてもダークツーリズムに関して経済学的研究は少なく、本プロジェクトを通じて本学が経済学的視点での積極的な研究を行ったことは日本観光学会等において高く評価された。

また、関連する研究としてダークツーリズムにおける加害性とジェンダーバイアスについても検討した。

(1)ダークツーリズムにおける加害性の認識

ダークツーリズムにおいては悲劇の犠牲者としての立場が強調され、旅行者はそれに共感・同情することで戦争や災害への理解を深める。しかし、戦争に関するダークツーリズムの遺構や施設は立場により解釈が異なる。広島・長崎に原爆を投下され数十万人が亡くなった日本ではその被害を展示しているが、アメリカでは原爆を投下した B-29 爆撃機「エノラ・ゲイ」は終戦に貢献した存在としてスミソニアン博物館（国立航空宇宙博物館別館）に展示されている。

ダークツーリズムは国際社会における多様な価値観や社会における「正解のない問題」を深く考える機会となるものである。そのため戦争による被害の強調だけでなく、その原因となる加害への認識を正しくすることが求められる。例えば、愛知県は製造業が盛んであったが故に軍需工場への空襲の被害が大きかった。空襲を行う側にとっては、日本の軍需工場を攻撃することは自らの被害を防ぎ、戦争を終結させるための行為であった。こういった視点の学習は現在の平和学習においては欠如しており、製造業が盛んな愛知県だからこそ産業観光において取り組めるテーマである。

(2)ダークツーリズムにおけるジェンダーバイアス

戦争の悲劇性は古くはジャンヌダルクや戦国時代の大名の妻子による人質、第二次世界大戦ではユダヤ人の少女による『アンネの日記』や太平洋戦争におけるひめゆりの塔のように女性が主役となることで強調されてきた。太平洋戦争では学徒動員で航空機の製造工場で働いていた相山女学園の生徒と教員 18 名が空襲で亡くなったことや、本学のダークツーリズムの取組が新聞やテレビにおいて「女子大学生による戦争に関する学び」として何度も取り上げられたことも、同様の「女性の悲劇」という意味合いがある。それが切っ掛けとなることで多くの人が知ることになるというメリットはあるが、実際の戦死者数・戦傷者数では圧倒的に男性が多く、ダークツーリズムにジェンダーバイアスがあることをどのように評価すべきかは検討する必要がある。

② 三河地方の戦争遺構の現地調査と観光コース化

戦争や災害の遺構を観光資源として活用するダークツーリズムに他の観光目的を合わせることで訪問者を増やす「明るいダークツーリズム」をテーマに、令和 7 年 7 月 6 日に三河での現地調査を実施した。現地調査では、戦争に関する遺構として、太平洋戦争で重要な役割を果たし、戦後は長くアメリカ軍の施設として使用された依佐美送信所記念館（フローラルガーデンよさみ内）や東洋一の規模を誇った豊川海軍工廠平和公園、現在は水田などの農地や宅地となっている明治航空基地跡を訪れ、施設の現状や展示内容、訪問客の状況等を調査した。教育旅行の訪問先としては、安城産業文化公園デンパークや赤塚山公園ぎょぎょランドを見学した。最後に豊川稲荷と隣接する豊川海軍工廠戦没者供養塔を訪れた。豊川海軍工廠には度重なる空襲で 2500 名以上が亡くなり、その中には学徒勤労動員で働いていた生徒もいた。豊川稲荷には多くの人で賑わうが、供養塔を訪れる人は少なく、戦争の風化を感じた。現地調査に基づいて教育旅行のためのコース化を考えた（添付資料②）。



③ イベント、学会等での発表

②で述べた現地調査の成果を踏まえて、令和7年8月30日に南山大学で開催された『戦後80年のダークツーリズム—観光資源としての新たな可能性を探る—』において「愛知県内の戦争遺構を活用した教育旅行の誘客促進」をテーマに発表した。令和7年9月25日に愛知県国際展示場（Aichi Sky Expo）で開催された『ツーリズム EXPO ジャパン 2025 愛知・中部北陸』において名鉄観光サービスのブースにて「愛知県内の戦争遺構を活用した教育旅行の誘客促進—明るいダークツーリズムの取組—」をテーマに発表した（添付資料③）。また、活発な意見交換を行った。

取組の内容と発表に関する記事は『中日新聞』令和7年7月10日、14面に「特攻隊員を訓練、潜水艦に指令、東洋一の兵器工場… 三河の戦争遺構 足運び知る 椋山女学園大生 小中高生向けツアー企画へ調査」として掲載された。また、東海テレビ『ニュース ONE』「若者引き付け“自分ごと化”を…戦争遺構と観光地巡る『明るいダークツーリズム』大学生が探る伝承の新たな形」令和7年8月4日、メ〜テレ（名古屋テレビ）『池上彰と考える！戦後80年～戦争のない未来のために～』令和7年8月15日、キャッチネットワーク（西三河のケーブルテレビ）他『東海の肖像』「戦後80年 記憶のバトンを受け継ぐ若者たち」令和7年8月22日、FMAICHI『Brother presents Music Earth』令和7年9月15日、メ〜テレ（名古屋テレビ）『ドデスカ+（プラス）』「若い世代へ伝承を 大学生が考える “明るいダークツーリズム” 戦争遺跡を未来に」令和7年10月8日が放送された。

2025年12月27日には東京国際フォーラムの地上広場で、『ふるさと映画祭2025』の戦後80年を記念したダークツーリズムに関するトークセッションに出演した。トークセッションでは戦争遺構を観光資源として活用することで戦争の過ちを再び繰り返さない学びとなる「明るいダークツーリズム」に取り組んでいること、愛知県内の戦争遺構を巡るコースと今後の全国各地への展開、戦争を「自分事」として何を学ぶことができたこと、どのように考えが変わったかなどを紹介した。また、水野英雄准教授は、ダークツーリズムと映画によるコンテンツツーリズムとの相乗効果や、戦争遺構の観光資源化による地方活性化の方策について説明した。

2026年1月25日には戦争と平和の資料館ピースあいちにおいて、ピースあいち研究会『「若者は戦争と平和をどのように学んでいるのか～椋山女学園大学の学生を囲んで～」』が開催され、水野英雄准教授による「戦争の原因としての経済問題」の講演と、学生による「大学生が考える戦争と平和～明るいダークツーリズムを通じて学んだこと～」の発表、参加者との意見交換、グループワークによる交流を行った。「戦争と経済」という深い関係があるテーマであるが、平和学習で重視されてこなかった視点による研究は関心が高く、また、若い世代の積極的な取組ということで、活発な質疑応答が行われた。

以上のように本学におけるダークツーリズムに関する研究は多くの発表の機会に恵まれ、旅行会社や行政等の関係者の関心も高く、多くのマスコミで報道され本学の社会的評価の向上に貢献する成果を挙げている。



4. 大学や地域・社会へ与えた影響

- ・戦争遺構を観光資源として活用するという先駆的な研究であり、学会等で高く評価された。
- ・多くのマスコミで紹介されたことで、**相山女学園大学を代表する取組となった。**
- ・全国的に有名となり、東京でのふるさと映画祭にも出演した。
- ・オープンキャンパスで発表したところ、来場した高校生や保護者から大変好評であり、入学意欲を高めることに貢献した。

5. 今後の課題

本学におけるダークツーリズム研究は研究者や社会的にも広く知られるようになっており、今後も継続して取り組むことで本学の知名度の向上や入学希望者の増加に貢献できる。そのため後輩に引き継いでいくことを考えている。

具体的には、2025年度に募集が行われた相山女学園創立125周年記念「みらい共創事業」に、卒業生・地域住民・起業家などが協働する実践事業として、「星が丘の街から平和を共創する―戦争を学び平和を考える展示とワークショップ―（仮題）」を提案し、採択された（添付資料④）。平和に関する取組は普遍的なものであり、次の世代に引き継ぐことは多くの共感が得られ、地域との交流や市民との共創となるものであり、本学の社会貢献として意義のあるものとなる。

- ・事業の成果の詳細を示すために、以下の資料を添付する。

添付資料① ダークツーリズムに関する研究の整理と経済学的研究の展開

添付資料② 愛知県内の教育旅行のためのダークツーリズムのモデルコース

添付資料③ 愛知県内の教育旅行におけるダークツーリズムの発表資料（2025年9月25日のツーリズムEXPO ジャパン 2025 愛知・中部北陸で発表）

添付資料④ 相山女学園創立125周年記念「みらい共創事業」提案内容